
逆説ロミオとジュリエット

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

逆説ロミオとジュリエット

【Nコード】

N2568P

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

いがみ合う二つの家が和解の為に仕組んだことは。それにより知らず知らずのうちに巻き込まれていく二人はどうなるのか。ロミオとジュリエットを変えて書いてみました。キャラクターの名前はベルリーニのオペラにちなんでいます。

第一章

逆説ロミオとジュリ

エツト

カプレーテイ家とモンテッキイ家は誰もが知る犬猿の仲だ。

それでだ。街のあらゆる場所で騒動を起こしていた。

街で双方が衝突しない日はなかった。来る日も来る日も決闘沙汰であった。

「困ったことだな」

「全くだ」

街の議会も頭を抱えていた。

「あの両家がこのまま対立を続けていたらな」

「街の平和なんて夢の話だ」

「あの両家はどちらもこの街で一番の権勢家だからな」

「だからこそ対立しているという一面もあるのだ。」

「このまま衝突が続けば街の繁栄にも影響がある」

「両家の当主はどう考えているんだ？」

「それも問題だがな」

「衝突を繰り返してもいいことはない筈だ」

議員の一人が言った。

「どちらにとつてもな」

「ああ。怪我人も出ているしな」

「何時死人がいてもおかしくはない」

「それに」

さらに話されていく。

「衝突が続くと両家の力にも影響するしな」

「ここは両家の為にも街の為にも」

「何とかしてもらうか」

「よし、それならだ」

「ここで話されるのだった。」

「手を打つか」

「手を？」

「どうするんだ？」

「考えがある」

こう話してだった。彼等は動いたのだった。そうしてだった。

カプレーティ家の屋敷でだ。一人の背の高い男が豪華な廊下を行ったり来たりしている。黒いビロードの服にマントを羽織っている。黒い髭は端整に切り揃えられ黒い髪を後ろに撫で付けている。彫の深い顔で鼻が高い。目は黒く強い光を放っている。

その彼のところにだ。栗色の髪を伸ばした緑の目の若者が来た。

青い上着に緑のズボンにマントという姿をしている。

「叔父上、御呼びですか」

「うむ、テバルドよく来てくれた」

男はまずは若者をこう呼んだのだった。

「それでだ」

「それでなのですか」

「総督と議会から話が来た」

「それで何と」

「件のことだ」

こうそのテバルドに話す。

「何とかせよとのことだな」

「ふむ。それではですが」

「それでは？」

「はい」

こうして話をはじめるのであった。そしてだ。

モンテッキイ家の屋敷でだ。赤い上着と黒いズボン、それに白いマントの若者がいた。茶色の髪に青い目を持っており白い顔はまだ幼さが残るは整っている。大きな目をしており口元は引き締まっている。彼は今白髪の男と話をしていた。

「それでロミオ様」

「うん、ロレンツォ」

まずは互いに話をし合うのだった。

「お父様の御言葉なのですが」

「父上から？」

「そろそろ結婚されてはどうかと」

こう話すのだった。

「そう仰っていますか」

「結婚か」

「ロミオ様ももうその頃です」

結婚する時期だというのである。

「ですからここは」

「そうか。だが」

「だが？」

「僕は誰と結婚するのだ」

ロミオが懸念しているのはこのことだった。その少女にすら見える顔には明らかに不安なものもあった。そのうえでロレンツォに話すのである。

「それが問題だが」

「そこまではわかりませんが」

「まだわからないのかい」

「はい、それはまだです」

ロレンツォはこうロミオに話す。

第二章

「ですが今度の舞踏会においてです」

「舞踏会で？」

「相手を見つけれられてはどうでしょうか」

「相手をかい。僕自身で」

「左様です。確かに然るべきお相手でなければなりません」

ロミオにこのことを告げた。

「そうでなければです」

「それは僕もわかってるつもりだ」

「モンテツキイ家のただ一人の方なのですから」

「モンテツキイ家の嫡流は僕一人だからね」

「左様です、ですから然るべきお相手でないと」

「だからそれはわかっているんだ」

ロミオはそれは確かだと話した。

「父上と母上には子供は僕しかない。だから本当に然るべき相手と」

「そしてそのうえで、です」

「カプレーティ家と対さないかね」

「左様です」

ここでまた言うロレンツォであった。

「ですから本当に然るべき相手と」 88

「わかっている。その相手を見つける為にも」

「そうです」

「舞踏会にね」

こうしてであった。ロミオはその舞踏会に出た。それは領主が主催しその屋敷で行われるのだった。その華やかな場所にいたのは。

栗色の髪に緑の目をした楚々とした外見の少女であった。髪はふらりとした波になっている。白い顔は透き通り眩いばかりだ。

ドレスは水色だ。その少女が来てだ。そうして言うのだった。

「あの、お兄様」

「お兄様は止めてくれないかな」

微笑んで言うロベルドだった。彼も少女と共にいる。

「それは」

「けれど私にとっては」

「お兄様だっというのかい？」

「はい、私は他に兄弟はいませんし」

「そうだね。カプレーティ家の一人娘」

「はい」

「ジュリエット、しかし」

「ここだ。ロベルドはさらに話すのだった。

「僕は君の従兄だから」

「お兄様ではないというのですね」

「うん、そうだよ」

その通りだというのだ。

「だからそうした呼び方はね」

「いけませんか」

「そう、よくはないよ」

また言うのであった。

「だから止めておいてくれ」

「ですが」

「まあジュリエットの好きにしたらいいよ」

ロベルドもここで折れたのだった。

「ただ」

「ただ？」

「まあ大丈夫だとは思っけれど」

「こんなことも言うのであった。

「それでも悪い奴には注意するんだよ」

「誘惑してくる相手ね」

「そう、そういう相手にはね」

「こう従妹に言うのだった。」

「絶対にね。声をかけられてもついて行かないこと」

「幾ら何でもそれはないわ」

「ジュリエットは笑って従妹のその言葉を否定した。」

「私だってもう子供じゃないから」

「わかっているけれどね。それでもね」

「注意しろっていうのね」

「そう、それはくれぐれもね」

「わかったわ。じゃあ」

「そうそう」

ロベルドは立ち去ろうとしたところでふと足を止めてそのうえで
また従妹に告げた。

「いい場所があるよ」

「いい場所って?」

「うん、バルコニーに行くといいよ」

お勧めの場所を紹介したのであった。

第三章

「あそこに行くとき夜空が見えるから」

「夜空が」

「今夜は月が綺麗だし。そこから見るといいよ」

「わかったわ。それじゃあ」

従兄の言葉に従いだっただ。実際にそのバルコニーに来た。そこから見上げる月はだ。白く淡い光を放ちそれで夜空を照らしていたのだった。

「あつ……」

ジュリエットは黒、いや濃い青の夜空の中に浮かび上がり全てを照らすその白い月を見上げて思わず声をあげてしまった。

「綺麗……」

月並みな言葉だがこの言葉が出てしまった。そうしてそのまま夜空を見続けるのだった。

そしてロミオはだ。家臣達に言われていた。

「ロミオ様、いい場所があります」

「そこに行かれてはどうでしょうか」

「いい場所？」

ロミオは彼等の言葉にまずは怪訝な顔になった。

「それは何処なんだい？」

「はい、庭です」

「この屋敷の庭です」

家臣達はそこだと話す。

「そこに行かれてはどうでしょうか」

「今から」

「そんなにいい場所なのかい」

ロミオは怪訝な顔になってそのうえで彼等に問うた。

「そこは」

「はい、薔薇が咲き誇っています」

「赤薔薇も白薔薇もです」

「薔薇がか」

薔薇と聞いてだ。ロミオの目がぴくりと動いた。

「いいな、それは」

「はい、夜の中の薔薇もいいです」

「ですからどうでしょうか」

「よし、わかった」

ロミオは彼等のその言葉に頷いた。

「今から行こう」

「それでは我々はこれで」

ここでロレンツォが言ってきた。

「お一人でどうぞ」

「僕一人でかい」

「はい、その方が薔薇を静かに楽しめますので」

「それでなのか」

「はい、それです」

ロレンツォは彼ににこやかに笑って述べた。

「お一人でどうぞ」

「わかったよ」

ロミオも彼のその言葉に頷いた。

「それじゃあ行つて来るよ」

「我々はここにいますので」

「楽しんでらして下さい」

こうしてロミオはその庭に一人で向かった。夜の世界の中の薔薇は赤と白の無数の光を放っていた。彼はその薔薇達を見て満足していた。

「勧めるだけはあるな」

家臣達のことを思い出しながらの言葉だ。

「いいものだな、夜の薔薇も」

こつ呟いている時だ。ふと声を聞いたのだ。

「奇麗……」

「んっ？」

その声が出た方を見た。そこはバルコニーだった。

バルコニーを見上げるとだ。彼女がいた。

「あれは……」

ジュリエットであった。月を見上げる彼女のその姿はだ。ロミオをして夜の中の薔薇なぞ比喩物にならないまでに目をひくものであった。

それで彼女を見上げているとだ。思わず声が出てしまった。

「美しい……」

「えっ？」

今度はだ。ジュリエットが気付いたのだった。

「誰ですか？一体」

「僕は」

「貴方は」

「ロミオといいます」

彼はジュリエットに問われるまま名乗った。

第四章

「これが僕の名前です」

「ロミオ様というのですね」

「はい、それで貴女は」

「ジュリエットです」

今度は彼女が名乗った。

「宜しく願います」

「そうですか。ジュリエットというのですか」

「そしてロミオ様なのですね」

二人はそれぞれ言葉を交えさせた。

「貴女のような方ははじめて見ました」

「はじめて？」

「そう、はじめてです」

ロミオはジュリエットを見上げながら答えた。

「本当に」

「私입니다」

ジュリエットもまた月の光に照らされるロミオを見た。白い光に照らされる彼はだ。まるで幻想の中から出て来た神の使いの如くだった。

「はじめて見ました」

「あの、それでなのですが」

「はい」

「そちらに行つて宜しいですか？」

ロミオは胸を躍らせながらジュリエットに尋ねた。

「貴女のところへ」

「私のところにですか」

「そうです」

またジュリエットに対して告げた。

「貴女のところへ」

「はい」

そしてであった。ジュリエットも頷いたのだった。

「是非。お願いします」

「是非ですか」

「はい、是非です」

ジュリエットはまたロミオに告げた。

「御願います」

「わかりました」

ロミオは満面の笑顔でその言葉に頷いた。そうしてだった。

「今からそちらに」

「いらして下さい」

「よいのですね」

「申し上げます」

こう返すジュリエットだった。

「ですから。どうか」

「わかりました。それでは今からそちらに」

「ロミオ様、いらして下さい」

ロミオは今まさにそのジュリエットの傍に向かおうとした。しかし
しだった。

ここのだ。庭に多くの人間の声がしてきたのだった。

「ロミオ様、こちらですか」

「まだここにおられてよかったです」

「本当に」

「あの声は」

ロミオはその声が生きた方に顔を向けた。

「家の者達か」

「御気をつけ下さい」

「今妙な話を聞きました」

「ロミオ様に危機が迫っています」

「危機？まさか」

危機と聞いてだ。ロミオも身構える。腰にあるその剣に手をかける。

「カプレーティの家の者達が」

「えっ……」

ジュリエットは一部始終をバルコニーから見ている。それでであった。

「それは私のこと？」

「モンテツキイ家の跡継ぎを狙っているとのことですよ」

「ですからここは」

「御気をつけ下さい」

「刺客か」

ここでロミオの目が鋭くなった。

「それなのか」

「その様です」

「ロベルドも来ています」

「間違いありません」

「ロベルドもか。あの」

ロミオは彼のことを知っていた。無論いい意味において知っているのではない。彼の敵としてだ。それで知っているのである。

第五章

「よし、わかった」

「まずはここからお下がりを」

「そしてこの屋敷から出ましよう」

「すぐに」

そしてであった。バルコニーでもだ。

「ジュリエット、そこか」

「お兄様!？」

そのロベルドがだ。彼のところに来たのである。

「探したぞ」

「どうかされたのですか？」

「モンテッキイ家の跡継ぎがここにいるらしい」

「この舞踏会にですか」

「そうだ、来ているそうだ」

狼狽した顔での言葉だった。

「ここには危ない」

「それでは一体」

「私が守るからな。ここから去ろう」

「ここからですか」

「そうだ、すぐにだ」

こうジュリエットに話すのである。

「それでいいな」

「わかりました」

「カプレーティ家の娘は私が守る」

「何っ!？」

今度はだ。ロミオが聞いたのであった。

「今何と」

「行くぞ」

ロベルドはバルコニーの下には気付かずだ。ジュリエットに告げる。

「今すぐここから消えよう」

「わかりました」

「ではロミオ様」

「こちらへ」

モンテッキイ家の者達もここでロミオに言う。

「どうかこちらへ」

「早く」

「うん、じゃあ」

こうしてであった。二人は別れ別れになった。しかしである。二人はお互いのことを知ってしまったのだった。だがそれでもだった。ロミオは己の家の屋敷にいた。その豪華な広間を歩き回りながらだ。ロレンツォに対して話した。

「いいかな」

「何でしょうか」

「君はこの前僕に言ったね」

「こつ前置きしてからの言葉だ。」

「そろそろ結婚を考えるべきだと」

「はい、確かに言いました」

「そうだね。それだと」

「相手は見つかったのですか？」

「素晴らしい人に出会えた」

「歩き回るのをここで止めた。」

「その人に」

「それはいい。ただ」

「ただ？」

「カプレーテイ家の娘だけは駄目ですが」

「ロレンツォはこう言ってきたのであった。」

「あの家の娘だけはです」

「えっ、それは何故なんだい!？」
「何故も何も理由ははつきりしているではありませんか」
こう返すロレンツォだった。
「あの家は我がモンテッキ家にとって仇敵ですね」
「それは僕も知っています」
「それならおわかりですね」
また言うロレンツォだった。
「あの家の娘とはです」
「そうだね。それじゃあ」
「あの家以外にもいい家は多くありますし娘もです」
「星の数だけいる?」
「ええ、います」
ロレンツォは若い主に静かに告げる。
「ですから」
「それはそうだが。だが」
「だが?」
「いや、いい」
ロミオは言葉を途中で止めた。

第六章

「別にいいから」

「そうなのですか」

「とにかく。そうなんだね」

「はい、そうです」

ロレンツォはそのまま主の言葉を返してみせてその通りだと答え
た。

「ですから他の家の娘を」

「わかったよ」

一応は頷いたロミオだった。

「それじゃあね」

「はい、そういうことで」

「しかし」

ここでまた難しい顔になるロミオだった。

「それは」

「それは？」

「いや、いいよ」

また己の言葉を打ち消すロミオだった。

「とにかくね」

「それでなのですが」

ロレンツォはロミオに対してさらに言ってみせた。

「これ以降カプレーティ家の者とはです」

「あの家の者とは？」

「会えばその時点で決闘を挑むことになりました」

「それは父上が決められたことが」

「はい」

その通りだと。はっきりと答えたロレンツォだった。

「その通りです」

「そうか。もうあの家とはこれからは」

「どちらが滅ぶかです」

「ここでの言葉はあえて峻厳なものにさせた。

「そうなります」

「あの娘とも」

「女子供であるうともあの家の者ならば」

「容赦はしない」

「はい、このヴェローナに生き残るのはどちらか」

「こんな話にまでなっていた。してみせたのである。

「まさにそうした戦いになります」

「そして僕もまた」

「お覚悟を」

こうロミオに告げてだ。ロレンツォはあえてその場を去りロミオを一人にさせた。一人になったロミオは頂垂れて一人考えに耽った。

「諦めなければならぬのか」

父の言葉はそのままモンテッキ家の決まりだ。従わなくてはならない。

しかしだ。そう思えば思う程であった。

「僕は。あの娘を」

想いは募っていった。それはどうしようもないまでになっていた。そしてだ。ジュリエットもだった。

「これからはモンテッキ家の者は誰であろうとも」

「誰であろうともですか」

「会えばそこで剣を抜く」

ロベルドはこうジュリエットに話していた。場所は彼等の屋敷である。

「そうだった」

「お父様がそう仰ったのですね」

「そして誰もがその言葉に頷いた」

「ではやはり」

「そうだ。我等カプレーティが滅ぶかモンテッキイが滅ぶか」
言葉はまさに終局に達するものだった。

「そのどちらかだ」

「どちらかですか」

「そうだ、ジュリエットいいか」

「はい」

「生き残るのは我々だ」

ロベルドは切実な顔になってみせてジュリエットに告げる。

「わかったな」

「私達がなのですね」

「そういうことだ。モンテッキイ家の者はだ」

「誰であるうとも」

「会えば殺す」

またあえてである。物騒な言葉を使ってみせた。

「そうなった」

「左様ですか」

「言うことはこれだけだ」

ロベルドもまたその場をわざと後にする。

第七章

「それでいいな」

「………わかりました」

ジュリエットもまた一人にさせられた。そのうえで想いを募らせる。するとだ。彼女もまたその想いを抑えられなくなってしまったのだった。

「私は。あの方を」

許されないとわかれば余計にだった。彼女もまたそうだった。それから暫くは両家の争いはなかった。しかしある日のことである。

ロミオはヴェローナの街を歩いていた。家臣達と一緒にである。

その彼等にだ。ロミオは問うた。

「いいのかい？街を歩いて」

「カプレーティ家の者達ですか」

「あの者達のことですね」

「うん、会うんじゃないのかな」

このことを危惧して話すのであった。

「そうならその時は」

「その時はその時です」

「斬り合うまでです」

「それだけです」

「そしてどちらが残るかまで戦う」

ロミオの顔がここで鋭くなった。

「そうなるんだね」

「今まではたまたま会わなかっただけです」

「それだけです」

「ですが今日はです」

違つとだ。彼等も言つたのだった。

「違います。会えばその時は」

「その時は斬り合い最後まで戦う」

「ロミオ様、宜しいですね」

傍らにいるロベルドも彼に言ってきたのだった。

「それで」

「そうだな。それならばだ」

主である父の決定である。それならばだった。

「僕もやはり」

「はい、我等もいますので」

「思う存分カプレーティの者達を斬りましょう」

「そうしましょう」

「わかった」

頷くしかなかった。そうしてであった。

彼等はヴェローナの街を歩む。やがて彼等は酒場に入りそこで酒盛りをはじめた。その時にロベルドはふとロミオに言うのであった。

「あの」

「あの？」

「実はですね」

こっそりと彼に囁いたのである。

「この酒場の外に面白いものを用意してあります」

「面白いもの？」

「はい、ヴェネツィアの商人が来ておりまして」

こっろミオに話すのだった。

「それでなのですが」

「商人から」

「はい、ロミオ様への贈りものです」

「僕にかい」

「用意してあります。どうぞお受け取り下さい」

「そんなに気を使わなくていいんだけれどね」

ロミオはロベルドの言葉にいささか困った顔になって返した。彼は酒を飲んでいない。しかし彼等と共にいてそれで話をしているの

だ。

「別に」

「いえいえ、そう仰らずに」

「どうしてもなのかい」

「はい、そうです」

こう話してであった。ロレンツォはまた若い主に勧めた。

「どうぞお受け取り下さい」

「そうか。そこまで言うのなら」

「きつと御気に召されます」

「わかったよ、それじゃあね」

「はい」

彼の言葉を受けて店の外が出る。その時にロレンツォも家臣達もこつそりと目配せをする。そのうえで一人が店の裏手に回った。だがロミオはこのことを知らない。

そしてである。ロミオが店の外に出るとだ。確かにそこには一人の男がいた。

彼はだ。ロミオにこう名乗ってきた。

「ヴェネツィアから来ました」

「らしいね。それで僕への贈りものとは」

「これです」

こう言つてその商人が差し出してきたもの、それは。

「これをどうぞ」

「これは……」

見ればそれは指輪だった。ダイヤの美しい指輪だ。それを出してきた。そのうえでロミオに対して言ってきたのである。

第八章

「トルコからのものでして」

「トルコからかい」

「はい、トルコからのものです」

こうロミオに話すのだった。

「受け取って頂けるでしょうか」

「有り難う」

ロミオは微笑んで商人に礼を述べた。

「有り難く受け取らせてもらうよ」

「はい、それでは」

商人はロミオにそのダイヤの指輪を渡すとそれで姿を消した。ロミオはそれを見送ってから酒場に戻ろうとした。しかしその時であった。

振り返ったそこにだ。彼女がいたのだ。

「えっ、まさか」

「どうしてここに」

彼だけでなくだ。彼女も驚きを隠せなかった。

「どうして貴女がここに」

「家の者に連れられてここに来ました」

こう話すジュリエットだった。

「それでなのですか」

「それなのか」

「家の者は店に入って私はここに来るように言われたのですが」

「どうしてここに？」

「お兄様、いえテバルド様が待たせている者がいるからと仰って」

「待たせている者」

「はい、ジェノヴァの商人でした」

それがその待たせている者だというのだ。

「そしてその者からこれを受け取りました」
「それは……」

見ればだ。それも指輪であった。今度はサファイアの指輪であった。

「その指輪を貴女にですか」

「贈りものだということだ」

「そうだったのですか」

「その商人はもう帰りました」

「奇しくもロミオの時と同じであった。」

「しかし私はここで」

「僕と出会った」

「そうです。ですが私達はもう」

「殺し合うことになった」

ロミオはこう言っただ。苦しい顔を見せた。

「だから僕は貴方を」

「私もです。私もまた」

ロミオは腰の剣に手をやった。ジュリエットも服からそつと短剣を出した。二人にそれぞれ危ういものも漂ってきたのであった。

しかしだ。ここでだ。ロミオが先に言った。

「しかし僕は」

「私もです」

ジュリエットも言うのであった。それぞれ眉を曇らせて。

「できない、どうしても」

「私も。そんなことは」

「貴女を殺すことはできない」

「殺すことは。けれど」

それでもだった。ここで言われるのだった。

「貴女からもう離れたくはない」

「この想いはどうしても消えません」

「ジュリエット」

「ロミオ様」

互いの名前を呼んで見詰め合う。

「忌まわしい、家同士の因縁なぞ消えてしまつて」

「それで貴方と共に」

「何故だ、何故貴女はカプレーティの娘なんだ」

「どうして貴方はモンテッキイの方ですか？」

互いに苦しい声で言い合う。

「こんな運命は。消えて欲しい」

「そして貴方と共に」

「そうだ、それならだ」

「はい。どうされるのですか？」

「この街の司教様にお話してみよう」

ロミオはふとだ。ヴェローナの司教のことを思い出した。信仰心が篤いだけではなくだ。非常に公平で心優しい人物として知られている。二人の家の者達もだ。この司教については敬意を払っている。

第九章

「あの方ならばきつと」

「そうですね。あの方なら」

「僕達に答えを指し示してくれる」

「こう考えるロミオだった。」

「そしてだ。また会おう」

「はい、そして再び」

「僕はもう貴女と離れたくはない」

「私もです。こうして再び会えたからには」

「また二人で言い合いであった。」

「この想い、適えられないのなら」

「もういつそのこと」

「こう話してであった。二人は誓い合う。だがここであった。」

「ロミオ様」

「ジュリエット様」

「それぞれ二人を呼ぶ声がしてきた。」

「何処ですか？」

「何処におられますか？」

「いけない、ここにいては」

「はい、これ以上は」

「二人はその声にはつとして我に返った。」

「残念だがここは」

「お別れするしかないのですね」

「また会おう」

「はい」

「二人は名残惜しい顔で相手を見て話す。」

「今はこれで」

「また」

こう話してであった。二人は別れた。そして次に会う場所は。夜の教会であった。ロミオが司教に話した結果だ。そこで会うことになったのだ。

ステンドグラスも礼拝堂も十字架の主もだ。今は夜の闇のカーテンに覆われよくは見えない。二人はその教会の中にいた。

そしてその前にはだ。司教がいた。

司教は二人に対してだ。まずはこう言うのであった。

「私も。貴方達の家の争いには」

「はい」

「どう思われていたのでしょうか」

「終わらせたいと思っていた」

こう二人に話すのだった。今三人は礼拝堂の前にいる。司教は主を背にしてそのうえで二人と向かい合って話をしているのだった。

「しかし。それは激しくなるばかりだ」

「ですが僕達はです」

「お互いが」

「わかっているよ。それでは」

「はい、それでは」

「私達は」

「指輪はあるだろうか」

司教はこう二人に尋ねてきた。

「それは」

「はい、ここに」

「あります」

こう言っただ。二人はそれぞれあの指輪を出してきた。

「ではこの指輪を」

「それぞれ」

「相手に捧げてくれ。それを婚礼の証としよう」

「そして僕達は」

「終生なのですね」

「そう。貴方達は一緒になる」
「そうだ。二人に告げた。」

「そしてそれから」

「はい、それから」

「何処かに行こう」

「こうジュリエットに言うのだった。」

「これからは」

「このヴェローナを出るのですね」

「僕達ここでは幸せになれない」

「だからだというのだ。」

「だから。この街を出よう」

「そうすれば私達は幸せになれますね」

「なれる、僕は君を絶対に幸せにする」

ロミオはジュリエットの顔をしかと見てだ。そうしてまた話した。

第十章

「だからここは」

「ここは」

「ヴェローナを出よう」

また言うロミオだった。

「今から」

「わかりました」

ジュリエットもロミオのその言葉に頷いた。

「私も。この街を出ます」

「僕と一緒にだね」

「はい、出ましよう」

ジュリエットも話す。

「そして幸福の場所に」

「二人で行こう」

「幸福ですか」

ここでだ。司教が言うのだった。

「貴方達の欲しいものはそれですか」

「そうだ、だからこそ僕達は」

「この街を出て」

「いえ、それには及びません」

司教はこう二人に話すのだった。

「この街を出られるのにはです」

「及ばないというのですか」

「それはどうしてですか？」

「何故ならです」

司教はここで懐から鈴を出した。そうしてその鈴を鳴らすとだつた。

「えっ……」

「まさか……」

何とだ。二人のそれぞれの家の者達が教会に入つて来たのだ。そうしてそのうえでだ。二人を囲んでそのうえで話をするのだった。

「結婚したか」

「よし、これでいい」

「これで全ては整つた」

「整つた？」

「整つたといひますと」

二人はその言葉を聞いてだ。驚きを隠せなかった。

「一体どういふことなんだ？」

「どうして貴方達がここに」

「全てはです」

驚く二人に司教が話す。

「定められていたことなのです」

「定められていたとは」

「一体何が」

「はい、今までカプレーティ家とモンテッキ家は争ってきました」

二人が街を去ろうとした最大の原因である。それが為に二人は結ばれれず幸福から離れてしまつていたからだ。それは当然のことだった。

「ですがそれはです」

「どうなるというのですか」

「一体」

「今終わりました」

そうになったというのである。

第十一章

「これで」

「終わったとは」

「あの、お話がわかりませんが」

「貴方達が婚礼を結んだことで両家は親戚同士となりました」
司教が話すのはこのことであつた。

「そう、争う必要はなくなったのです」

「というと」

「まさか」

「はい、貴方達が二つの家に幸福をもたらしたのです」

「その通りです、ロミオ様」

「ジュリエット、よくやってくれた」

ロレンツォとロベルドもそれぞれ出て来た。

「これで両家は結ばれました」

「もう争う必要はないのだ」

「話がわからないのだな」

「どういふことなのですか？」

「つまりです。もう誰もが争いに倦んでいたのです」

話が全くわからない二人に司教がここで告げる。

「それで御二人を結ばせようということになりました」

「それで僕達を会わせて」

「そのうえで」

「はい、それが見事功を奏しました」

司教は満足した面持ちで話した。

「御二人を騙すようで悪いですが」

「いや、それでも」

「私達は確かに愛し合っています」

それは確かだと。二人は言う。

「しかしそれでいいのだろうか」

「何か。違う気が」

「いえ、これでいいのです」

「そうだ、確かに会わせたのは私達だ」

「釈然としない感じになった二人にまたロレンツォとロベルドが話
す。」

「しかし御二人が愛し合われて自ら婚礼を結ばれたのは事実です」

「それは確かなのだからな」

「そうなのか。それなら」

「私達はこのまま」

「左様です」

司教はあらためて二人に顔を向けてにこりと笑ってみせた。

「ですから御二人はこのまま愛を紡がれて下さい」

「そしてそれが平和へとつながるのか」

「このヴェローナの」

「平和は剣によってもたらすこともできます」

司教はまずは一つの現実を話した。強大な国力、武力を持っているならばそれによって秩序を維持できる。そういう意味での言葉だ。

「ですが」

「ですが」

「それ以上になのですね」

「はい、愛は確実な平和をもたらします」

「そうだとするのである。」

「ですから御二人はそのまま平和をもたらされるのです」

「それならジュリエット」

「はい、ロミオ様」

二人は顔アを見合わせて互いに言い合う。

「これからは二人で」

「平和をもたらしましょう」

「それではだ」

カプレーテイ家の者達もモンテツキイ家の者達も出て来た。それぞれの家の主達もいる。誰もがその場に集まっていた。

「このはじまりを祝おう」

「愛のはじまり、そして」

「平和のはじまりを」

「幸せな婚礼のこの場において」

こうしてロミオとジュリエットは結ばれヴェローナに平和が訪れたのだった。争いが終わりその先にあるのは。かけがえのない愛であった。

逆説ロミオとジュリエット 完

2010・8・30

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2568p/>

逆説ロミオとジュリエット

2010年12月1日21時55分発行